

評価項目

V 河川工作物による影響が軽減されるなど、サケ科魚類の再生産が可能な河川生態系が維持されていること。

モニタリング項目

- ①河川内におけるサケ類の遡上数、産卵場所および産卵床数モニタリング
- ②淡水魚類の生息状況、特に知床の淡水魚類相を特徴付けるオショロコマの生息状況（外来種侵入状況調査含む）

評価基準

- ①各河川にサケ類が遡上し、持続的に再生産していること。
河川工作物による遡上障害が実行可能な範囲で回避されていること。
- ②資源量が維持されていること。
外来種は、根絶、生息情報の最小化。
夏季の水温が長期的にみて上昇しないこと。

評価指標

- ①遡上数、産卵床数、河川工作物の遡上及び産卵への影響
- ②水温、オショロコマの生息密度、外来種の生息情報

評価（案）

①

・各河川にサケ類が遡上し、持続的に再生産していること。

【評価基準に一部適合】

調査を開始した2012 (H24) 年以降、対象3河川（ルシャ川、テッパンベツ川、ルサ川）においてカラフトマスの遡上数及び産卵床数は継続的に確認されていることから評価基準に適合していると思われるが、年ごとに大幅な増減がみられ、持続的に再生産がされているとの結論は情報が不十分なため時期尚早と思われるため一部適合、現状維持の評価とした。



個別評価：



・河川工作物による遡上障害が実行可能な範囲で回避されていること。

【評価基準に適合】

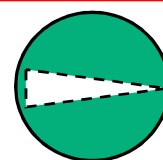
改良が適当であると判断された5河川13基の河川工作物について、改良後の2年間（2013 (H25)～2014 (H26)）及び5年経過後の2年間（2019 (R1)～2020 (R2)）に改良効果を検証したところ、工作物を改良した全ての河川で遡上が確認され、遡上の障害は実行可能な範囲で回避されていることから評価基準に適合していると思われる。遡上数は総じて改良前より増加はしているが、今後において、更なる改良が適当とされる工作物もあることから、応急的な対応を図りながら、現況よりも遡上への障害を少しでも軽減できるように対応を検討する必要があるため現状維持の評価とした。



個別評価：



個別評価：



⑱

・資源量が維持されていること。

【評価基準に非適合】

知床半島の淡水魚類相を特徴付けるオシヨロコマの生息密度の変化を、2007 (H19) 年～2012 (H24) 年、2013 (H25) ～2017 (H29)、2018 (H30) ～2019 (R1) 年で分析すると、増加傾向が認められる河川もあるが、全体としては減少傾向にあることから評価基準に非適合であり、悪化の評価とした。



個別評価：



・外来種は、根絶、生息情報の最小化。

【評価基準に非適合】

調査対象河川でのニジマス（外来種）の生息密度は、減少が認められる河川はあるが、自然繁殖の可能性がある河川もあり、全体としては個体数の減少は確実とは言えないことから評価基準に非適合であると思われる。また、全体として増加、減少傾向は明確に判断できる状況ではないことから、現状維持の評価とした。



個別評価：



・夏季の水温が長期的にみて上昇しないこと。

【評価基準に一部適合】

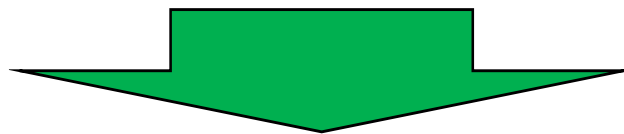
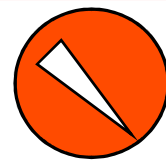
37河川中、水温評価ができた32河川において、15河川で経年的な水温上昇が認められたが、9河川で経年的な水温低下が認められた（評価方法により一部河川は重複）。また、12河川では上昇、低下のいずれの変化も認められないことから、全体的に河川の水温上昇がおきているとは言えないと判断できる。このことから評価基準に適合していると思われるが、7月の水温が長期的に上昇傾向にあることもあり、一部適合、悪化している評価とした。



個別評価：



個別評価：



評価値

2.5

注視すべき状態